

生育の進みは早い！中干しは早めに実施しよう

～ 田植後 25 日をめやすに茎数を確認し、中干しを遅れずに開始 ～

【管理のポイント】

- 中干しにより無効分けつの発生を抑え、適正な穂数を確保する。また溝切りを合わせて行うことでほ場の地耐力を向上させ登熟後半の水管理を円滑にし、コンバイン収穫を容易にする。
- 中干しは出穂 1 か月前までに終了し、その後は飽水管理で根の健全化と地耐力の確保に努める。
- 定期的に畦畔・農道等の除草を行いカメムシ類の被害を防ぐ。

1 中干しの程度と終了時期

- 溝の間隔は 8～10 条おき（間隔は 2.5m 程度）、深さは 10 cm 以上とし各溝の末端は必ず排水溝につなげましょう。
- 中干しは、田面に小ヒビが入り、軽く足跡がつく程度とします。溝切りによって、かん水や排水が容易になります。
- 例年倒伏するほ場や大豆跡等、生育過剰となりやすいほ場では「強めの中干し」を実施しましょう。
- 中干しの終了時期が遅くなると根の張り方が不十分となり、高温や乾燥の影響を受けやすくなるので、**出穂 1 か月前（早生：6/25 頃、コシヒカリ：7/4 頃）までに終了しましょう。**



【溝の末端を排水口に接続した状態】

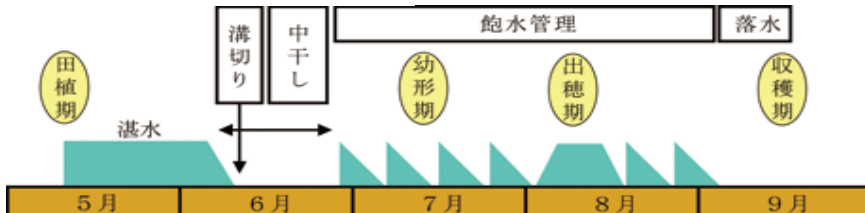


【○適正な中干しの状態】

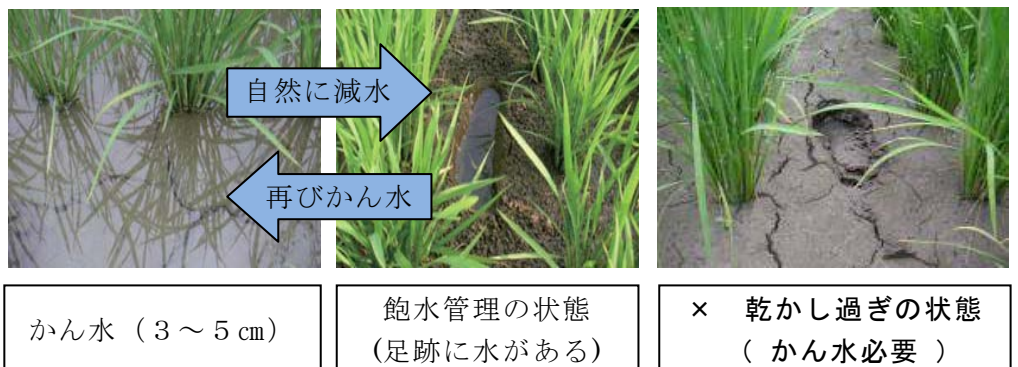
2 中干し後の水管理＝飽水管理

- 中干し終了直後は、浅水の間断かん水を実施し、その後徐々に飽水管理へ移行します。飽水管理（田面や足跡や溝に水が溜まっている状態）で、出穂後の根の活力を維持します。

【水稻生育期間の水管理】



【飽水管理の方法】



かん水（3～5cm）

飽水管理の状態
（足跡に水がある）

× 乾かし過ぎの状態
（かん水必要）

3 定期的な畦畔・農道等の除草の実施

- 定期的な草刈りは、斑点米発生防止及び畦畔の景観維持につながります。
 - ・ 昨年は中山間地を中心に「斑点米」による格落ちが目立ちました。定期的な草刈りは斑点米カメムシ類の耕種的な発生防止対策となります。
 - ・ カメムシ類の餌となるイネ科を中心とした雑草が結実する前に実施することがポイントです。**6月上旬以降、3～4週間隔で除草を実施しましょう。**刈草を残すと斑点米カメムシ類の住みかとなります。早めにほ場から処分しましょう。

4 穂肥診断について

- 穂肥診断については、必ずほ場ごとに幼穂の長さを確認しましょう。
- 1 回目の穂肥施用時は、必ず草丈・茎数・葉色を調べ、**生育診断を行い、時期と量を判断し実施**しましょう。
- なお、穂肥の施用に当たっては、**葉色が濃いほ場は施用時期を遅めにするなど、それぞれの稲の生育量に応じて、時期と量を加減**しましょう。
- 5月10日頃移植の「新潟次郎」（飼料用）は6月25日頃から1回目の穂肥時期となります。遅れずに施用しましょう。
- もみ数過剰は品質低下につながります。1回目の穂肥が早すぎたり多すぎると、もみ数過剰や倒伏が助長されます。極端に多い1回目穂肥は避けましょう。

【品種別穂肥施用時期および量】

※平坦地 5/10 頃移植の場合

品 種 名	1 回目穂肥 出穂前日数	2 回目穂肥 出穂前日数	2 回合計窒素量 (10a 当たり)	出穂期の めやす※
五 百 万 石	20	12	1～2kg	7/25 頃
わ た ぼ う し	22～20	12～10	2～3kg	7/28 頃
こ し い ぶ き	23	14	2kg	7/27 頃
こ が ね も ち	18～15	10	1～3kg	8/3 頃
新 潟 次 郎	25	12	6kg	7/20～24 頃